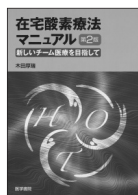


書 評

●飛田 渉(東北大保健管理センター所長)

在宅酸素療法マニュアル

新しいチーム医療を目指して 第2版



著：木田 厚瑞

A5 頁 360 2006 年
 定価 4,515 円(本体 4,300 円+税 5%)
 [ISBN 978-4-260-00153-3]医学書院刊

在宅酸素療法(home oxygen therapy: HOT)は、1985年に保険適応になって20年を過ぎました。わが国における在宅医療のパイオニア的役割を果たしてきたと言っても過言ではありません。この間、HOTは大きな変貌を遂げてきているのも確かです。基礎疾患が大きく変わっているのもその理由の一つです。HOT患者ははじめ、肺結核後遺症が全体の約3割を占めていたのが漸減し、間質性肺炎や肺癌のHOT患者が増加してきております。新たに睡眠呼吸障害を伴う心不全にHOTが適応となりました。一方では、HOT患者の高齢化も起こっております。当初、平均年齢は63歳でした。それが今や70歳を超えています。さらに社会環境の変化に伴い、HOT患者においても例外なく核家族化が進んだだけでなく、独居患者も増加しています。このような背景あって、HOTの今後のあり方がきわめて重要な課題になっています。

本書の著者、木田厚瑞氏はわが国の呼吸病学の第一人者であり、呼吸器疾患患者のリハビリテーションに関する臨床研究を一貫してなさってきました。特に、呼吸器病の治療にはチーム医療による包括的なアプローチが必要であると、「包括的呼吸リハビリテーション」のプログラムを提唱しました。1995年のことです。これを契機にわが国において、チーム医療による呼吸リハビリテ

ーションが多くの医療施設に導入されるようになりました。

本書は木田氏が1997年に発刊した『在宅酸素療法マニュアル』の初版を加筆修正し、第2版としてまとめられたものです。初版後の9年間にわが国のHOT医療が大きく変貌してきたことを踏まえ、HOTのこれまでの歩みはもちろん、HOTに関する新しい知見にとどまらず、現在あるいは今後さらに問題になると思われるHOTのチーム医療や包括的リハビリテーションにおける位置づけ、さらにはHOTを軸とした医療連携のあり方や医療倫理とインフォームドコンセントに関することがわかりやすくまとめられています。

最終章では、将来への課題についても触れられています。また、章立てがクリアでどこから読んでも理解しやすいように工夫されており、重要なポイントにおいては「NOTE」として補足説明がなされています。図表や引用論文も多いことにも魅かれます。限られたスペースのなかに豊富な内容を体系づけて、しかも簡潔にまとめられています。これは木田氏が呼吸器病患者を専門に診療の第一線で永年活躍された後に、大学の医学部に移って得られた豊富な経験をもとに、本書が第2版として再構築されたからだと思われます。

本書を一読すれば、その内容が決してHOTにとどまるものでなく、在宅医療全般に当てはまる内容であることがご理解いただけることでしょう。HOTを軸に、読者にチーム医療としての在宅医療について考える機会を与えることが木田氏の狙いではなかったかと思われます。一般臨床医、看護師、理学療法士、薬剤師、栄養士、保健師など、医療従事者のみならず医療機器担当者や在宅医療行政に携わっている方々、そしてこれから在宅医療を学ぶ研修医や医療系学生にとっては必読の書です。